

## 4. 分子研研究会「2010年の分子科学を語る」

### 4-1 挨拶；分子研所長 伊藤光男

我が国における分子科学の研究のはじまりが何時であったかは色々と思いの別れるところですが、かなり象徴的なものは1930年代の水島、森野の回転異性体の研究ではないかと思えます。その後、水島門下による多彩な研究が展開され、島内、坪井等による振動状態、長倉、馬場、田中等による電子状態の研究、はては生体関連分野まで大きな広がりを示しました。一方、赤松、井口による有機半導体の研究に端を發し物性化学の研究が大きく花開き、また福井によるフロンティア電子理論の創出により日本の分子科学の理論研究はノーベル賞で象徴されるように一躍世界の檜舞台におどりでした。

戦後の極めて困難な時代に、現在の分子科学の基礎となった上述の研究が芽をふき、分子科学研究の洋々たる将来に大きく胸をふくらませたことは当時を知るものとして忘れることはできません。このような燃えるような情熱を背景に、我々の先輩が血と汗をふりしぼり分子科学研究の飛躍的發展を期して分子科学研究所を設立されました。分子科学という言葉自体も研究所設立にあたってはじめて用いられたもので、現在では世界に広まっています。分子研設立以来23年が経過しました。燃えるような理想と情熱、さらに恵まれた研究環境のもとで分子研発足後の10年は分子科学の研究に新風を吹きこみ、短日月のうちに分子科学研究の世界的中核拠点としての地位を確保するに至りました。その後は安定、成長期を迎え、分子科学の分野の広がりとともに、分子研でカバーする分野も広がりを見せ、現在では創設時の約2倍の規模になっています。分子研のみならず、日本における分子科学研究は分子構造総合討論会で示されるように肥大化しています。これは時代の趨勢で致し方ないことでしょうか、この間、果たして真に独創的な研究が生まれたかどうかについては大いに疑問を感じざるを得ません。現在では大学の研究環境も、分子研の特殊装置等を必要としないところまで改善しています。色々問題はありますが、研究費もある所にはパブ的な状態にもなっています。一昔前は研究費不足が言い訳になっていましたが、今はそれも許されなくなりました。このような状況のもとで、分子科学の研究というものを皆でもう一度改めて考えてみたいということで企画したのがこの会であります。

我々は目前に迫った21世紀に分子科学研究の飛躍的發展を切に願っています。とりあえず約10年後の2010年の分子科学を展望したいと思います。これは当然のことながら2010年に分子科学研究を中心となって支えるであろう現在の若い人達が何を考えているかにかかっています。それでこの会の前半は若い人にそれぞれの夢を語っていただくことにしました。この会は語るのが目的ですので、一方的な発表ではなく皆と自由にきたんのない意見を述べあう会にしたいと思います。脱線は大いに歓迎します。また今晚は皆さんに分子研の今後の在り方について討論していただきたいと思っています。日頃分子研について思っていることをさらけだしていただき、大いに活を入れてください。

会の後半は分子科学のいわゆる境界領域について、それぞれの立場からお話をさせていただきます。境界領域といいますが、現在では分子科学の中核が果たして何であるか非常にあいまいになっています。分子研設立当時に考えてい

